

伊東市史だより

第5号

平成16年3月22日



写真左上 九州日向伊東氏の根拠地飫肥城大手門
写真左下 飫肥城本丸城内の石垣と歴史資料館
写真右上 飫肥城主伊東氏の館「豫章館」
写真右下 飫肥城下の武家屋敷群

写真提供 田畑みなお

日向伊東氏の活躍

— 写真解説に代えて —

伊東を発祥地とする伊東家は、全国各地へ広がったが、その中で、明治大正期まで名門として栄えたのが、飫肥藩五万三千石の伊東家である。明治になって伊東子爵家となり、伊東に別荘を構えて、十三代当主伊東祐弘子爵が伊東水力電気の二代目社長を務めるなど、伊東との縁も深かった。

飫肥は、現在は宮崎県日南市の一部であるが、江戸時代を通して、伊東祐時（工藤祐経の長男）を初代とする伊東家の城下町として栄えた。今も城下町の面影を色濃く残した観光地として人気の高い場所である。

堂々たる構えの大手門をくぐると、「松尾の丸」などの城郭もあり、周囲2.5キロに及ぶ城跡全体がいい雰囲気であるが、城の東一帯の上級武士の屋敷町も見事で、武家屋敷や石垣・長堀など往時の姿をよく残して、国指定の伝統的建造物保存地区になっている。

（編集委員 加藤清志）

古代史部会の活動

編集委員 山本幸司

(静岡文化芸術大学教授)

市史編さん委員会の古代部会は、部会長である山本のほか、坂井孝一・近藤好和の両氏に加え、一部の作業を担当して頂いた繁田信一氏をあわせて、最大四名という小規模な部会です。

基本問題と作業の経過

古代部会における調査・編集上の難しさは、他の時代といささか異なった点にあります。それは何よりもまず、伊東市域に限定した場合、文書史料がきわめて少なく、ましてや新出史料の発見というのは、ほとんど望めないという基本的な制約によるものです。

ただ新出史料がないといつても、これまでの調査・研究をそのまま鵜呑みにして、何のチェックもしないでいるわけにはいきません。そのため、これまでかなりの時間は、古代史の基本史料類を改めて全冊見直しながら、伊豆や伊東に関する記事がないかどうかを点検

する作業に費やされました。

これまでに手分けして点検した文献は、次に記す通りです。

- ①史書
『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』『類聚国史』『日本紀略』『本朝世紀』『百鍊抄』『扶桑略記』
- ②法律書類
『類聚三代格』『延喜式』『令義解』『令集解』『類聚符宣抄』『別聚符宣抄』『政事要略』『朝野群載』
- ③儀式書類
『儀式』『新儀式』『内裏式』『西宮記』『北山抄』『江家次第』『中外抄』
- ④記録類(これに関しては全冊でなく一部のみのものも含む)
『貞信公記』『九曆』『吏部王記』『親信卿記』『小右記』『御堂関白記』『権記』『左経記』『春記』
- ⑤軍記書類
『将門記』『保元物語』『平治物語』『陸奥話記』『平家物語』『源平盛衰記』『曾我物語』

⑥その他、既刊の地方史誌あるいは神社関係史料
『伊東市史』『静岡県史』『平安遺文』『式内社調査報告』『日本の神』



伊豆の古代史について講演中の山本先生

検討結果

これまでの作業の結果、現時点では、当初より予想されたとおりではありますが、すでに刊行されている『伊東市史』『静岡県史』などに収載された史料以上の新出史料は発見できませんでした。

今回、史料を検討するにあたって、神祇史の関係から、①伊東市域の神社に祀られている神格の来

えられるからです。

また軍記書類については、いずれも浩瀚な書物ですから、部分掲載するしかありませんが、どの本のどの箇所を掲載するかは選択が必要で、これも現時点では『平家物語』に関しては、伊東氏関係の記事が載っているのは、延慶本や『源平盛衰記』などの広本系諸本であるため、史料編としては、その二本の記事を掲載すれば充分かと考えられます。『曾我物語』のほうには妙本寺本・太山寺本などを含め、伊東氏関係の説話文学の中心として、史料編・通史編ともに中核となる物語ですが、これを史料編にどのような形で収めるか、一応の方針は決定していますが、これも通史編の記述との関わりで問題は残るでしょう。

これまで述べたように、古代部会は全体として地味な存在ではありませんが、歴史の起点として重要な意味を持つ時代であり、部会としても市民の皆さんの期待に応えられるよう、今後も努力して参ります。

自然環境・災害部会の活動

編集委員 笹本正治

(信州大学教授)

伊東市史がよその市町村史と異なるのは、「自然環境・災害部会」という変わった部会があることではないでしょうか。私たちの部会では、市民が過去の伊東の災害を認識し、防災の意識を抱くと共に、災害から逃れることができる安全な都市計画を作る礎になる仕事をしたと思っています。

部会では、すでに以下のように執筆分担が決定されています。小山真人「火山と温泉の恵み―火山が作った伊東の大地と自然―」、西山昭仁・今村文彦「地震と津波―前近代の伊東の災害―」(歴史部分西山、津波の部分今村)、矢島有希彦「目に映る災害―近・現代の伊東の災害―」、笹本正治「災害から生まれた文化―伊東の防災文化―」。

本年度はそれぞれの目的にしたがって、個人で研究・調査をしてきました。

一方で、小山先生と私は神戸大

ります。これらのテキストをすべて網羅的に検討して、どのような記事があるか、またそのうちのどの記事を載せるべきかなどを検討することは、古代末期の伊東の歴史を知る上で重要な作業です。

さらに、これもテキストとして忘れてはならないのは、富士野の狩場における曾我兄弟の仇討ち物語である『曾我物語』です。『曾我物語』にも妙本寺本や太山寺本などの異本があり、一般に必ずしも歴史史料としての価値を評価されてはいない物語ですが、伊東に関する限り、本書にしかない記事なども含めて必須の史料として検討しないわけにはいきません。それに軍記物語の歴史性を考えるにあたっては、それ自体が生の史料の一部であるという、鎌倉初期の同時代性と同時に、室町期における曾我兄弟伝承など、フィクションとしての享受の問題と重なる思想的史料であるという側面も無視できないのです。

その他に、物的史料としての文化財についても検討してみました。伊東市域の文化財には、直接

学の石橋克彦先生を中心とする科学研究費、「古代・中世の全地震資料の校訂・電子化と国際標準震度データベース構築に関する研究」に参加しており、会議で顔を合わせながら伊東の情報交換をしています。この科学研究費では史料校訂などに西山先生の協力を仰いでおります。また、歴史地震研究会などでは今村先生も一緒になおります。矢島先生には独自に災害写真や災害の瓦版などを収集して頂いています。

本年はそれぞれ別個に調査活動をしてきましたので、私が注目してきたことを挙げることにします。それは一碧湖の赤牛に関する伝説と土石流災害との関連性です。一碧湖の赤牛伝説は様々な語られ方をしていますが、宮内卯守氏の『伊東の民話と伝説』（サガミヤ、一九七五年）から要約すると次のようになります。

昔、一碧湖は吉田の溜池とか大池と呼ばれ、村人たちの大切な交通路として船で行き来していた。寛永（一六二四～四四）の頃、岡村の小川沢にある池に、神通力を

もった赤牛が住んでいた。この池が年々浅くなり住みにくくなったので、赤牛は新しい住みかを求めてある夜池を抜け出し、吉田の大池にやってきた。赤牛はそのまま大池に住みつき、村人たちが大池を船で通ると、これをひっくり返し、さらに池に落ちた村人を食い殺すようになった。光栄寺の日広上人は赤牛の悪さを見過すことができないとして、赤牛の魔力を封じ込めようと決心した。そこで上人は十二島のうち一つである小島に渡り、七日七晩お経をあげ、赤牛の魔力封じを行い、ついに成功した。日広上人は二度と赤牛の魔力が現われないようにと、この小島に御堂を建て、自ら書き写した経文数巻を納め供養した。そこでこの小島をお経島と呼ぶようになった。

伊東市民ならほとんどの方が知っている伝説ですが、注目したいのは人に害をなす赤牛が岡の小川沢から来たとされていることです。伊東郷土研究会編の『むかしむかしあつたとき 伊東の民話と伝説をたずねて』（城ヶ崎文化資料

館、一九七八年）では、赤牛は岡の小川の「池の平」から移ってきたとされています。ここでは池の底には竜がいたとあり、島のまわりに大蛇がいたというので、赤牛は竜（＝大蛇、水の神）でもあったことになります。



一碧湖 経島の景観

いずれにしろ、一碧湖の赤牛は小川沢、もしくは池の平から移ってきたというのです。しかも赤牛は水に関する災害をもたらしました。見方を換えると、この場合、災害の原因はよそからやってきた赤牛と理解されたのです。

勝呂弘氏編の『伊豆の民話集』には、「池の平の赤牛」が採録さ

れています。

戸田と西浦を結ぶ山道の池の平には、昔、大きな池があり、赤牛が住んで人々をたぶらかすとうわさされていた。ある時、戸田の男が西浦に出かけ、池の平のほとりまで来ると、池のふちに一匹の大きな赤牛がねそべっていた。男は里人のうわさを思い出し、腰に持っていた大蛇を隠しながら牛に近づき、頭めがけて切りつけた。赤牛は血をふきながら池の中に飛び込んだ。しばらくすると、一匹の大蛇が池の上に浮かび上がり、みるみるうちに池の水が引いた。やがて池は干上がり、里人も安心して通れるようになった。

伝説は一碧湖によく似ています。が、赤牛（大蛇）を退治したら池がなくなつたと言います。赤牛と水との関係を伝える伝説は長野県にもあり、『北安曇郡郷土誌稿』には北安曇郡白馬村の「親池の由来」が出ています。

神代村堀之内の「せいどう」の池に、赤牛が主として住んでいた。ある日、この主は堀之内の家毎に暇乞いをして池を去り、佐野坂下

の池へ入ってここを住居とした。その後この池を去り、青木湖に移り住んだ。それで青木湖の親という所からこの池を親池と言っている。

この伝説では、赤牛は農具川沿いに上流から下流へとすみかを変えています。同じ『北安曇郡郷土誌稿』には、北安曇郡小谷村の「山王の池の主」伝説も採録されています。

中土村清水山区には山王様が祀っており、付近に山王の池があった。この池の主は赤牛で、村の人々が草刈りに行くと、一緒に遊んだそうである。少し前にその池を潰して大きな田にしたが、近年清水山部落の崩壊と共に抜けて、また池にはじめている。

池は山崩れでできたようで、この地域には災害の伝説が数多くあります。北安曇郡は土石流災害が頻発した場所ですが、そこに赤牛伝説があるのです。さらに同書には八坂村の「牛廐の話」が載っています。

八坂村左右の日陰村の堤という所に昔大きな池があった。この池

の主は角が一本の赤い牛であつたが、この池の土堤が切れて流れ出したので、飛び出して八坂村と信級村との境を流れる濁沢の淵へ飛び込んだ。その後池は浅くなつて用水となり、牛の飛び込んだ淵の近くを牛廐というようになった。今でも天気の変わり目には牛の鳴き声が聞こえるという。

赤牛の住む池が破壊していることに着目したいと思います。これまでの伝説を総合するなら、赤牛は池が決壊して、茶色の水の塊となつて突進する様子を形容した、すなわち水害に直結しているようです。

山梨県では「赤牛池」（土橋里木編『甲斐伝説集』）という似たような伝説があります。

およそ四百年前、老婆の額に角が出た。老婆は手拭をかぶつて隠していたが、風が吹いて手拭を飛ばし、頭の二本の角を嫁や近所の者に見られた。老婆は恥じて西山に至り、山中の池に投身してその池の主になった。池は今の甘利山の榎池（韮崎市）である。その後天文年中（一五三二～五五）領主

甘利氏の二子がこの池で釣りをし、誤つて溺死したが死骸が水底に沈んで現れない。これは池の主の仕業であろうと、領主は里人に命じて、付近の榎を伐り倒して池中に投げ入れ、その上に土石汚物等を入れて池を埋めた。その時、池中から先に投身した老婆の化身である赤牛が飛び出して大笹池に走つた。赤牛は大笹池に行っても住むことが出来ず、さらに野牛島の能蔵池（南アルプス市）に逃げたが、果たしてそこにも落ちついたかどうか分からない。

赤牛は榎池から大笹池、さらに野牛島の能蔵池に移るのですが、能蔵池は御勅使川沿いです。御勅使川は武田信玄が信玄堤を施したこと有名な荒れ川ですから、能蔵池も洪水や土石流の場所といえます。こうした点からすると、伝説に出てくる転々と移動する赤牛は、土石流災害と密接な関係を持つようです。私たちの身近なところにある伝説も、視点を換えると災害の事実を伝えているかもしれないのです。

とするならば、一碧湖の赤牛伝

説に出てくる岡地区の沢沿いなどでは、土石流に注意をする必要があります。実際歩いてみますと、急傾斜で狭い谷が多く、大雨の際には警戒をしなくてはと思う場所があります。また、一碧湖でも水害に注意する必要があるかもしれません。

このように、一碧湖の赤牛伝説は、一見すると単なる魔物伝説に見えますが、実は、その背後に先人たちが残してくれた「災害に注意しろ」という未来へ向けたメッセージが込められている可能性があるのです。私たちは伝承の中からも過去の災害を探り、防災に努めたいと考えています。どんなさやかな伝承でも結構ですから、災害に関係しそうな伝説や諺などを教えて頂けないでしょうか。市史編さん室までお知らせください。

伊東市史刊行計画の概要

平成十六年一月十九日市長を委員長とし、議会代表、学識経験者など委員十三人で構成する市史編さん委員会が開かれ、編集委員会から提出された刊行計画について

審議されました。

その結果、次の表に示したとおりの巻構成と刊行計画で調査執筆作業を進めるものとして計画案が承認されました。

伊東市史刊行計画表

(刊行予定平成・★印は既刊)

本編	刊行予定年
目でみる伊東市史	平成17年
古代・中世史料編	平成17年
近世史料編Ⅰ	平成18年
民俗編	平成19年
考古史料編	平成19年
近世史料編Ⅱ	平成20年
近代・現代史料編Ⅰ	平成21年
近代・現代史料編Ⅱ	平成22年
通史編Ⅰ	平成22年
通史編Ⅱ	平成23年
自然環境・災害編	平成23年

伊東市史調査報告

「民俗」「棟札」「石造物」「文化財」

伊東市史叢書

★「郷土史研究集成」★「狩野川台風」★「温泉」★「文化財」

「教育史料」「自然誌」

伊東市史研究「伊東の今・昔」

★一号～三号・続刊四号～十二号

平成十五年度市史編さん事業報告

出版物

これまでの市史編さん事業によって刊行した図書を紹介します。いずれも市内取扱希望書店または市教育委員会窓口にて実費頒布(各一〇〇〇円)しています。

平成十五年度に頒布開始した市史叢書第四号『伊東の文化財』は全頁カラーで市内の代表的文化財の紹介をしています。あらためて伊東が文化財や歴史資料の豊富な土地であることが感じられます。



市史編さん事業による出版物

また、『伊東の今・昔—伊東市史研究—』第三号も同時に頒布しています。市史講演会の記録や最新の調査成果をまとめています。



上ノ坊古文書サークルの勉強会のようなす
(天城湯ヶ島町小森家の伊豆国絵図を拝観)

古文書ボランティアとの協働

伊東市立図書館で行われた古文書読解講座の修了者で結成されている古文書読解の市民サークルとの協働作業が進んでいます。毎月第二、第四土曜日に勉強会をもつ「上ノ坊古文書サークル」と毎月第一、第三木曜日に会合をもつ「古文書ボランティア」のふたつのグループの皆さんが市史編さん事業への協力態勢をとってくださることにまりました。執筆される先生方も強力な助っ手の登場にたいへん喜んでおられます。

市史講演会・市史講座

古代史部会長 山本幸司先生による「源頼朝一族と伊豆」をテーマに講演会が開かれ、会場いっぱいの市民が古代史から見えてくる伊豆の特質を学びました。また、伊東の民具をテーマにした「民具を観る・描く」市史講座(講師 外立ますみ先生)も開催されました。市史編さん事業は市民が自分たちの歴史を学ぶ場でもあります。

お願い

歴史資料をさがしています。古文書や明治・大正・昭和の記録、写真、古い本などをお持ちの方はお知らせください。歴史資料といっても難しいものである必要はありません。おじいさんの日記、町内会の記録など日常的なもののこそ市民の歩んだ道を示す資料です。資料について専門家の鑑定を受け、適切な保存法のアドバイスを受ける絶好のチャンスでもあります。ご協力ください。

編集発行 伊東市教育委員会生涯学習課

市史編さん係

〒414-8555伊東市大原二丁目一番一号

☎〇五五七・三六・〇一一内線二八四五